

侑の机の引き出しの奥底から出てきたそれは、到底私の手に余るものだった。

一目見ればすぐに侑が書いたのだと分かる細くて几帳面なおそらく十人に見せたら九人は女の子が書いたと言うであろう——でもどこか幼さも残した拙い字でたったひと言、それだけ書かれた短冊は、察するにいつかの七夕のときに小学校で書いたものだろう。

私と侑が通っていた小学校では、七夕になると毎年グラウンドにこんなものどこから運んできたんだと思うほど大きな笹の木が決まって設置されていた。全員が願い事を書かなくてはいけないというものではないが、せっかくあんな大きな笹の木があるのだからと大多数の生徒が短冊を括りつけていた。色とりどりの短冊で飾られた校舎の二階まで届く笹の木が天に向かって突き出ている様子はなかなかの見物だったのを覚えている。侑の通う中学のことは知らないが、私がいた中学でも大方同じようなことをやっていた。そして、中学生になるとそれまでの七夕の景色とはだいぶ変わってくる。小学校では溢れていた「野球選手になりたいです」とか「バティシエになりたいです」とかそういった類の願い事はきれいさっぱりなくなつて、今現在の欲望を露わにした願いになつていく。「ゲーム機が欲しいです」「ライブ当たりますように」「高校に受かりますように」……。しかしそうは言つてもまだわずかに未来への期待を風船みたいに膨らませた、ほんのりと淡く光る願い事もまだわずかばかり残っている。「すてきな人と結婚できますように」「凜ちゃんはずっと一緒にいられますように」……。

だがそんな期待も高校生にもなるといよいよパチンと弾け、現実的に実現可能であり、また極めて無難であり、当たり障りのない、それこそ誰にも何も言われないうちにも願ひしか書く者はいない。そもそもわざわざ短冊を手にして願いを書き留める生徒だつて数えるぐらいしかない。思い返してみれば私の高校にも昨日何かのついでみたいになつていなくとも校門脇に笹の木が置いてあったが、それはわざわざ短冊しか身にまとつていなかった。試しに覗き込んでみると、どの短冊にも示し合わせたかのように「健康でいられますように」とだけ書かれていた。どれも書いてやつたと言わんばかりの、精气というものがまるで感じられない字だった。三日前に袋から出してそのまま放置した乾パンみたいなパサパサとした無味乾燥極まる願いだと思つた。しかし成長するとはあるいはそういうことなのかもしれない。

私はそのあたりで七夕について考えることをやめ、手中にある侑の極めて漠然としたその願いをしばらくぼんやりと眺めていた。これが侑の心からの願いなのか、そうだとするとどういふ背景と心境をもつてして侑がこれを願つたのか、私に分かるはずもなかった。それは私の侑についての理解の範疇をとうに超えていたし、そもそも考えてみれば私が自分の弟について本質的に理解していることなんて何ひとつないのだ。

「凜。橘さんよ」

階下からかすれた母の声がした。私は掌の短冊をどうしたものかとしばらくためらつた

末に、結局もとのように丁寧に二回折りたたみスカートのポケットに突っ込んだ。

「何してるの、凜」

疲れが滲んだ母の声に、分かりやすく苛立ちが追加される。

「今行く」

私はドアを閉める前にもう一度部屋全体をぐるりと見回し、短冊を取ったこと以外に部屋に入った形跡がないことを確かめると、少しばかりの後ろめたさを抱えながらその息の詰まるような部屋を出た。

「お待たせ」

家の壁に背中をもたれかけてぼんやりしていた美波は家から出てきた私に気が付くと、その端正な顔にっこりと笑みを浮かべた。

「いいよ。行こう」

今朝の美波は夏らしく長い髪を高いところで一つにまとめていて、普段よりどこか幼い雰囲気をもとっている。その髪型はすらりと細長い彼女の身にとってもよく似合っている。

「また弟君の部屋をあさったの？」

美波は歩きながら笑顔を意地の悪い類のものに変えて私の顔を覗き込んだ。

「別にあさってるわけじゃないよ」

私は軽く笑い飛ばそうとしたが思ったようにうまく笑えなかった。

「ほんとに」

美波に対して言っているのか自分に言い聞かせているのかよく分からなかった。

「ふうん」

美波はつまらなさそうに前を向いた。「なにか面白いものでも見つかった？」

私はポケットに折りたたまれていた短冊を頭に描いた。それが面白いものなのか私には分からなかったけれど、少なくとも世の中にもっと面白い物事があるように思えた。

「別に」

私は美波の髪を見た。「何もないよ」

「ふうん」

すっかり夏を帯びた朝の風が二人の隙間を縫って通る。「それより」

後ろに結った美波の長い髪がふわりと揺れた。

「髪型、似合ってるよ。すごく」

美波はこちらを向くとまたにっこりと笑った。

「ありがとう」

それから学校までは二人とも無言で歩いた。私はその間ずっと美波の歩幅に合わせてふわりふわりと揺れる彼女の髪を眺めていた。

*

六月も終わろうというある日のことだ。その日はもう一週間以上だらだらと雨が降り続いていて、湿気をはらんだ重たい空気がそこらじゅうにどすんとのかかっていた。街の景色は上からばさりと鼠色のベールを被せられたようにぼんやりと霞み、通り過ぎる人々はみな一様に疲れた表情を浮かべていた。一緒に帰った美波は世界の終わりをみたいな日だと言っていた。本当にそんな日だと思った。

だからいつものように学校が終わり家の前で美波と別れ、傘を閉じ玄関に足を踏み入れたときに感じた「それ」も、ただこの重苦しい梅雨が運んできた一時的なものだと思っていた。確かに「それ」は異常だった。一歩家の中に入った瞬間、「それ」がどろりと身にまとわりつくのがはつきり感じられた。暗くて、どろどろしていて、そう、ひたすらに闇の中を歩いているような。沈黙。どこに行けばいいのかも知らずにひたすら歩き回る。何も見えない。自分が今どこにいるのか、いや、そもそも歩き回る自分が本当にいるのかすら分からない。そんな恐怖と絶望とをたっぷり詰め込んだ空気が家中に立ち込めていた。階段をのぼり二階に上がるとその空気はより濃密になった。階段を上がって左手にある自分の部屋に入り窓を開ける。自室の中は廊下よりもだいたいふましかったけれど、相変わらず外にはしとしとと雨が降り続け、鼠色の世界は生気を見失っていた。その外のどんよりとした空気は家の中に漂う「それ」よりはありふれたものだったが、暗く淀んだものであることに変わりはない。これではちっとも換気にならない。私はまた窓を閉めた。この家も長雨のせいで気が滅入っているのだろう。きつとそれだけの話だ。寝る前に帰ってきた母は疲れ切っていて、家の空気に気づいている余裕などないようだった。それで私もこの異様な空気についてそれ以上深く考えることはやめた。きつと梅雨が終われば外の空気と一緒に自然とどこかへ消え去ってしまうだろうと、そう思っただけでベッドに入った。

だがそんな私の期待が現実になることはなかった。

翌朝は昨日までとは打って変わってからりと晴れていた。カーテンの隙間から差し込む溢れんばかりの朝日で目が覚めたけれど、身体に張り付く重苦しい感触と立ち込めるその空気は夕べから変わっていなかった。

次の日も、その次の日も雲一つない青空が広がり続け、テレビの中のお天気お姉さんも口角を吊り上げて梅雨明けを告げていた。街の景色はすっかり色彩を取り戻し、行き交う人々が大きき声を上げて笑い合うようになってもお、我が家の異様な空気は消えなかった。それどころか日時を重ねるたびに「それ」はどんどん濃密なものになっていき、家の中の息苦しさは増す一方だった。

七月に入り世の中が夏への準備の気配を漂わせる中、我が家だけがいまだ梅雨のさなかにぼつんと取り残されている。

*

「凜。帰ろ」

帰りのホームルームが終わり、生徒たちが散り散りになっていく。家か部活か予備校か、各々の目的の方へ向かってゆく。この時間の教室は騒がしい。その騒がしさは理由も結論も目的もない会話で満ちている。「どうしよう」「やばい」「それはやばいって」「マジで?」「うんうん」……。

それは入口も出口もないトンネルのように思えた。始まりもなければ行き着く先もない。ただひたすらその場に留まり続け、それを目的としてつくられたトンネルのような……。

「凜ってば」

透き通る声ではっとして顔を上げる。私が座っている机に両手を突いて見下げるような姿勢の美波と目が合った。

「帰りたくないの?」

真っ白い肌に浮かんだ水晶玉のような瞳が覗き込む。私は顔を上げたままかぶりを振った。また今のあの家に帰ることを考えるといささか憂鬱ではあったが、それ以外に私が行くべき場所などどこにもないこともまた事実であった。

「帰るよ」

「じゃあ一緒に帰ろう」

美波はふんわりと甘い笑顔を向け、また透き通った声で言う。美波の声はいつだって今みたいに綺麗に透き通っていて、無意味にこだませずにすっと耳に入ってくる。

学校でこんな風に綺麗にしゃべる人を、私は美波以外に知らない。

昇降口へ続く狭い廊下を歩く途中、目の前で揺れる彼女の艶やかなポニーテールを眺めながらそんなことを思った。

一歩校舎の外に足を踏み入れた途端、昼とも夕方ともつかない時間帯の暑さがべたりと貼りついてくる。朝にはからっとした心地のいいものだったそれは、もうじつとりと湿り気を含んだ不快なものに姿を変えていた。

「ねえ、今日凜の家寄ってもいい?」

校門を出ると美波が言った。

「今日?」

「ほら、期末も近いし。私家でひとりだと集中して勉強できなくて」

私より頭ひとつぶんぐらい背の高い彼女が斜め上から視線を向けるのが分かる。「だめかな?」

反射的にいいよと答えそうになるのを押しとどめ、目を自分の足元にやった。足を前に出す度、スカートのポケットに入っている折りたたまれた短冊の感触が分かる。別に美波が家

に来ることは珍しいことでも望ましくないことでもないが、今の我が家に招き入れるのはいささか躊躇われた。少なくとも、どんどんひどくなっていくあの空気の正体も分からないまま外の誰かを家に入れることはあまり良いこととは考えられない。美波だって「それ」を感じ取って奇妙に思うかもしれない。そして「それ」が何かと聞かれても、私にだって分からないのだ。それに、私は一刻も早くあの空気をどうにかしたかった。

「うん、ちよっと今日は。ごめんね」

私は短冊の感触を感じながら視線を上げずに言った。

「そっか」と美波は言った。「残念」

こういう際に「なんで？」と聞いてこない彼女ほどありがたい存在はないと思った。

振り向いて後ろを見やると、昨日校門脇に設置されていたささやかな笹の木はもう姿を消していた。きつと今頃、何も考えずに飾られたわずかな数の健康祈願とともに燃やされているであろう惨めな笹の木の姿が、不意に頭に浮かんできた。

交差点まで行くと、美波は図書館に寄って勉強していくと言って反対側の道へ消えてしまった。一緒に行こうかと思っただけれど、不意に今日が火曜日であることを思い出してやめた。火曜日は侑の塾がある日だ。早く帰って侑の部屋にある原因を少しでも早く見つけ出すのが、今するべきことだろう。どのみち美波を家に呼ぶことはできなかったわけだ。私はローファアの角をコツコツと鳴らしながらやたらと長い赤信号を睨みつけていた。

この一週間で分かったことがある。異様な空気の原因は侑だ。いや、正確には「侑の部屋の何か」と言った方がいいかもしれない。侑の部屋に近づけば近づくほど「それ」は濃くなっていき、そして侑が家にいなくても「それ」がなくなるといふことはない。侑の部屋からその空気が発せられていることは明らかだった。しかしいくら根本的な原因が侑にあるとはいえ、普段からろくに顔も合わせず、最後に言葉を交わしたのがいつだったかもよく覚えていないような侑にそんなことを聞けるはずもなかった。だから私は侑の部屋にあるはずの、「それ」を吐き出している「何か」を見つけ出そうと考えた。それは本質的な解決にはならないとしても、それを見つけない限り「それ」の正体も分からないし、「それ」が消え失せることもない。家の中の不快感はひどくなる一方で、特にここ数日、侑の部屋の隣にある自室は隣から発せられる空気に押しつぶされ、自室にいるときはまるで泥の中で息をしているような気分だった。

そして、それを母は知らない。疲れ切って気が付いていないのか、それとも分かっているか、目を逸らしているのか、朝と寝る前に少しだけ顔を合わせるときもまったくそんな素振りは見られない。いつものように皺と疲労の刻み込まれた顔で必要最低限の事務的な言葉を交わすだけだった。

だから自分でそれを見つげ出して破壊するかこの家から放り出すしか、この空気をどう

にかする方法はなかった。朝のわずかな時間に加えて、侑は月曜日以外の平日は塾で帰りが遅くなるから、その都度時間が許す限り侑の部屋を探し回っていたが、一向に目的のものが見つかる気配はない。いよいよ家の空気が耐えられなくなってきたものだから、できる限り侑の部屋を探しておきたかった。

信号が青に変わる。ふと後ろを振り返ると、美波は角を曲がってしまい、求めていた彼女の姿はもう見えなくなっていた。

私は今朝見つけた短冊の感触を確かめながら、早足で陰鬱な自宅へと向かった。

*

玄関をくぐると、母と鉢合わせになった。

ちょうど今から夜勤に出るところらしく、身にまとったスーツは家の空気を否応なく吸い込んだようにくたびれていた。化粧もいつもより手早く済ませたことがまるわかりで、普段よりも疲労が分かりやすく顔に浮き出ている。そして私はそんな母にかけるべき言葉を持ち合わせていなかった。

「夕飯は冷蔵庫にオムライスとサラダあるから。適当に食べ」といて」

私は自分に話しかけられているということを理解するまでに時間がかかった。

思えば父が死んで以来、侑だけでなく母ともろくに口を利いていない。必要最低限の事務的な会話以上の、たとえば今日こんなことがあってどう思ったとか、この前こんな本を読んだとか、そんなどこにでもあるような会話ですら、私たちは交わしていない。

「ああ……。うん」

不自然な間で片言に返事をする、もうそれ以上話すことはなかった。いや、話すべきこと、話したいことは本当はたくさんあった。心の中には普通の母と娘として、話さなければならぬことはいくつも抱えてあるはずだった。それなのにいざこうして母と顔を合わせると、自分と母との間で共有できるものなど何一つないように思えてくるのだ。そしてそれは当然、侑との間ではなおのことだった。

私があるま何言うでもなく階段を上がろうとしたとき、母は思い出したように「あ……、そうだ」と呟いて億劫そうにこちらに振り向いた。「凜ももう高校生なのはわかるけど、勝手に私の化粧品を持ち出すのはやめてちょうだい。お小遣いくらいあげるから」

母はぶっきらぼうにそれだけ言うと、私の返事を待たずに玄関を出て行った。

私は今さっきの母の言葉をもう一度心の中で反復し、しばらくかけてようやくと内容ががまます重くのしかかってくる。私は自分の心臓の鼓動がどんどん速くなっていくのを感じた。心のどこかは寒いのに、別のどこかは熱い。熱くて仕方がない。私は今にもその場に崩れ落ちそうな身体を必死に持ち上げ、二階の侑の部屋を目指した。

私は母の化粧品を持ち出したことなど、一度もない。

*

私の弟は小さいころから繊細な子どもだったと思う。と思う、というのもこれは私から見た侑の姿に過ぎないのであって、他の人から見た侑はまた違った侑なのだろう。でもとにかく繊細という側面は少なからず持っていたと思う。でもそれは別に異常なことでもなんでもなくて、むしろ、それは伸ばすべきある種の才能だったのだ。侑はただごく普通の家庭に生まれて、ごく普通の環境で育ってきた普通の男の子に過ぎなかった。

幼い頃の侑はよく私に懐いていて、常に私の少し後ろを付いてきた。家から十五分ほど歩いた先にある河川敷で、母に連れられて二人でよく川遊びをしていたのを覚えている。たまに近所の子もそこに来ていたが、侑は同い年の友達と遊ぶより私と遊ぶ方が楽しかったらしく、晴れた日は毎日のように川で遊んでいた。そこでの侑の特別のお気に入りにはウシガエルだった。草が生い茂っているところには必ずウシガエルを何匹か見つけることができて、侑は一度ウシガエルを見つけるとじっとその瞳を飽きるまで覗き込んでいたものだった。ウシガエルをただ気持ち悪い生き物としか思っていなかった私は、ウシガエルのどこにそんなに夢中になるところがあるのか、一度侑に尋ねてみたことがある。そのとき侑は確か、別にウシガエルじゃなくてもいい、どんな生き物でも瞳をじっと見つめれば、今までのような人生を送ってきたんだろうとか、今どんなことを思っているんだろうとか、そういう心の動きみたいなものがだんだん浮かび上がってきて、そういう想像が尽きることはない、たまたま目の前にウシガエルがたくさんいるし、ウシガエルの目はとても綺麗なんだ——こんなことを言っていた気がする。

小学校四年生くらいになると、川で遊ぶ頻度はだんだん減り、やがて一緒に外で遊ぶこともなくなっていく。私ももう弟と一緒に遊ぶような年齢ではなくなっていたし、そうなるのは自然の成り行きで、適切な成長の段階であるように思えた。私と遊ぶことはなくなったものの、侑はその代わりに学校の友人と遊ぶようになった。侑はそのときにはもう外で遊ぶより屋内でパズルやカードゲームをやった方が楽しいようで、外に出ることはあまりなくなっていた。

しかし五年生になり、侑の成績が優秀であったことで、父が侑は中学受験をするべきだという判断を下すと、もう屋内で遊んでいる暇はなくなった。侑の日常は進学塾に通いつめ、終日勉強に励む日々に一変した。しかし地頭がよく理解力も長けていた侑は、特に父に反抗することもなく、真面目に勉強を重ねて無事に関東で最も優秀だと評される私立の男子校に入学した。父と母は頭脳明晰な息子を自慢に思い、姉である私にとってもそれはまったく誇らしいことであった。

けれど、それからの侑は私と両親が想像していた姿とはかけ離れていた。毎日電車で片道

一時間かけて学校に通う侑は、日に日にやつれていくように見えてくるのだ。はじめこそ期待に満ちた火照った顔で、電車が来る二十分前に勇み足で家から出て行った侑は、桜がすっかり散った季節にもなるとその期待も消え失せたような青白い顔で、遅刻ギリギリの時間に登校するようになった。春休みにはどの部活に入ろう、運動部はやっぱり厳しいのかな、と楽しそうに話していたけれど、結局どの部活にも入ることはなかった。日が進むにつれ、侑は家でもあまり喋らないようになり、学校が終わるとすぐに帰宅して自分の部屋にこもって本を読んだり勉強をしたりして過ごす時間が増えた。

そして何よりも両親が心配したのは、侑から友だちの存在をまったく感じられないことだった。自分から友だちの話をすることもなければ、中学三年生になる現在まで、休日に侑が友だちとどこかへ遊びに行く、という場面をまるで見たことがない。夕食の時間に母がさりげなく「家で勉強ばかりしないで、お友だちと遊びに行ったりしてもいいのよ」と言っても、侑はただ「遠いのに誘うのは悪いから」とだけ、いつも決まってる言葉だけを面倒そうにつぶやいて席を立つのだった。父はたぶん、侑がこのような状態になったことを自分の責任だと思っていたのだろう、ただ憂いた表情で息子を見守るだけだった。

そのまま二年生になると、侑は自分から塾に通いたいと言い出した。侑の成績は中学に入ってからでも優秀そのものであったし、今から無理に塾に通う必要性はないのではないか。母からその申し出を聞いた父は、侑にできるだけ優しい言葉を選んでそう言った。しかし侑は表情ひとつ変えず、ただ首を横に振るのみであった。父と母にできることは、侑の望み通り塾に通わせてやることだけだった。

侑は週四日塾に通うようになり、そしてますます顔は青白く、ますます無口になっていった。私はおろか、両親とも必要最低限の言葉しか交わさず、いよいよ自室にずっとこもるようになった。たまに顔を合わせると、そのつぶらな瞳からは生気が失われ、常に憂いを含ませたどこを見ているのかわからないような目つきをした。

そして父が死んだ。侑が二年生、私が高校一年の夏のことだった。交通事故だと言われたから、たぶんそうなのだろう。それ以上のことが私たちにわかるはずもない。交通事故で死んだのだと言われたのなら、交通事故で死んだんだと思うしかない。二五〇年前に水素が発見されたことと、先週自分の父が死んだことに、一体どれほどの差があるのだろうか？ そう考えるとなんだかよく分からなくなって、気怠い暑さの中で執り行われた葬式では、私も侑も一滴の涙も流さなかった。親戚からはずいぶん薄情な子どもたちだと思われたに違いない。

しかしそうは言っても侑には侑なりに考えるべきことは山ほどあったわけで、父の死という年表的な出来事はそれでも侑の心の中に大きな影響を与えたことは疑う余地がなかったのだ。

そのことにもっと早く気付くべきだったのだ。いや、それよりも前に、侑はたぶん、まわりの目を覗き込むことに疲れてしまったのだ。中学校で自分を取り囲まわりの目はあ

まりにも多義的で、ウシガエルの目とは比喩物にならないぐらい複雑で絡み合っていたのだ。侑の鋭敏な感性でそれらを汲み取って想像力を働かせることは、侑に経験したことのない混乱をもたらしたに違いない。そして瞳をじっと覗き込んでその人の感情や思いを推し量ることが、本当は心がときめくことだったそれが、いつの間にかただ疲れることに変わってしまったのだ。それは誰にでもなしうることではない、侑にしかできないことだったのに。小学校で見ていたのとぜんぜん違う、まったく複雑な心の動きを前にして、侑にどうして友人がくれただろう？ もっと早く、私はそういうことに気付くべきだったのだ。でも私がそれに気付いたとして、一体侑に何ができたと言うのだろうか？

*

一歩一歩足を持ち上げながら、階段を上る。ただでさえ足が重いのに、家じゅうに立ち込める異様な空気はもはや耐え難いほどに私を押しつぶしてきた。もうすこし。あとあもうすこしで、私は侑に——侑に何ができる？ 私は侑のことが何もわからない。わからないけど、でもやらなければならない。私は侑の姉なのだ。そしてこのままでは、侑はきっと悪い方向にしか進まない。

侑の部屋のドアはまるで開けられることを拒むように重く、それでも誰かが開けてくれることもまた望むかのように構えていた。深呼吸をして、ドアノブに手をかける。ゆっくり、ゆっくり押ししていく。重く反発していたドアは、ある段階までくると突然に軽くなり、私の中へ入れることを許してくれた。

部屋の中に足を踏み入れた途端、朝とは比較にならないほど強烈な空気が私を襲い、思わず身を引いた。真っ白い殺風景な部屋。趣味と呼べるものの気配がまるで感じ取れず、最低限必要なものだけを整然と揃えたような静かな部屋だった。その部屋に並べてあるものすべてが息をしていないようだった。そしてその部屋が発する陰鬱な空気はそこにあつた蒸し暑さと結びつき、私を必死に離すまいとするかのように纏わりついて離れない。やがて濃密な空気が凝縮してひとつの悲鳴となり、私の耳を突き刺した。名伏しがたい、心のゆらめきのような悲痛な叫びが頭の中をこだまする。侑の中の何かが、あるいは侑がこの部屋に持ち込んだ「それ」が、助けを求めているのだ。私は直感的にそう感じた。そして私はなんとしてでもそれを取り除かなければならない。そのときの私には不思議と、あれだけ探しても見つからなかった、その悲鳴を発している何かが潜んでいる場所が、何もしなくともわかるようだった。両手で耳を塞ぎ、身を屈めながら、逆風が吹いてくるような部屋を一歩ずつ進む。

勉強机の奥にある本棚の前で足が止まる。私は何も考えずにその場にしゃがみ込み、下から二段目の棚にある本を床に積んでいく。ステイブソン、ヘミングウェイ、カフカ。私は躊躇うことなくそれらの本をどかしていった。そこにあることを伝えるかのように、声がどんどん大きく、強烈なものになってゆく。五冊ほどどかしたところで、奥から大きめの、

明らかに女もののポーチがひとつ姿を現した。ゆっくりと息を吸い込み、なぞるようにポーチを開ける。そこには想像通り、母が持っている化粧品と、それだけでなく侑が自分で手に入れたであろう化粧品の数々が現れた。綺麗な色合いのアイシャドウや、コーマージュで話題のファンデーション、ブランド物の高いリップ。私はそれらを涙を飲み込みながらひとつひとつ手に取って眺めた。めまいがした。世の中にそういう人がいることは知っている。テレビや新聞でもよく話題にされることだ。とりたてて珍しい話題でもない。そう、わかっている、わかっているのに、いざ自分の弟の部屋から大量の化粧品が出てきたら、私は一体どんな表情をして、何を思えばいいのだろうか？

私は長い時間をかけて化粧品のすべてを手を取ってから、またそれらをひとつずつ丁寧にポーチに戻し、もとの場所に収めた。そのときの私には、それがあくまで表層に過ぎないこと——もつとおぞましい、心の深淵みたいなものがさらに待ち受けていることがわかった。部屋のなにもかもを押しつぶす鉛のような空気も、心の叫びもまだ消えていない。それどころか、それはもうすぐそこまで来ていることを伝えんとするばかりに主張を強めている。私はポーチが隠されていたところから右腕を突っ込み、下の暗闇をまさぐった。すると二回目と一段目の狭間の空間に、何かがつつかえていたような感触がした。私が慎重にそれに触れた途端、耳を切り裂くような悲痛な叫びが頭を打った。思わずバランスを崩した体をすぐに立て直し、確信とともにゆっくりと腕を引き出す。そこには小さな紙でできた箱があった。間違いない。これが家じゅうにのしかかる重苦しい空気の根源であり、侑の心を徐々に蝕んでいるのだ。しかし目当てのものを見つけたという達成感を味わう余裕などなかった。なぜなら私はその箱の蓋を開けた途端、目の前に現れたものに対する言語化しえない恐怖で目がくらんでしまったからだ。

小さな箱の中から出てきたのは——大量のウシガエルの眼球だった。綺麗な形でくり抜かれ、汚れひとつなく磨かれつくされたそれらの眼たちは、この世の醜い感情をすべて詰め込んだような視線で私を一齐に睨みつけた。私は恐怖のあまりに箱を投げ出してその場に崩れ落ちた。箱の中から眼球のいくつかがこぼれだし、ゴロゴロと不気味な音を立ててビー玉のように床を這いまわる。私は今まで体験したことのない、本来ならばこの世に存在するべきでない種類の恐怖に一瞬で囚われた。自分の心臓が急いで波打つ音が聞こえ、身体じゅうの血液がドクドクと走っている。心の奥が凍り付いたようで、うまく息ができない。手と足ががくがくと震える。苦しい。床に転がる眼のひとつが私を捕らえる。その憎悪と醜悪で満ちた目は、かつての侑が熱心に覗き込み、想像力を促し心を豊かにするものとはまるで対極の、見ているだけで人々をその呪いみたいなの、世界の淵のようなどころへ連れ去ってしまうようなおぞましい力を持っていた。恐怖が私を支配していた。侑はウシガエルを殺し、その眼球をくり抜き、宝物を扱うようにそれらを丁寧に洗い、磨き上げ……。そこまで考えたところで、私は胸の中から何か酸っぱいものがこみ上げてくる感覚がわかった。目の前の光景

がぐらつき、息するのが苦しい。

どうすれば——私はどうすればいい？　こんなとき、美波がそばにいてくれたら。何も言わずとも、彼女がただここにいて背中をさすってくれれば、それだけでいいのに。彼女の艶やかな髪と、なめらかな肌と、透明な水のような声があれば、美波がいれば私は——違う。美波はここにはいない。彼女の透き通る優しさは、ここにはない。いるのは私だけだ。侑をこの泥沼のような場所から引きずり出せるのは、私だけなのだ。

私は震える足で立ち上がった。じつとりと嫌な汗が背中にはりつき、顔から流れる。ゆつくりと足を前に出し、本棚の向かい側にあるカーテンを引っ張り、窓を開放した。からからに乾いた喉で大きく外の空気を吸い込む。身体に酸素が巡り、ゆつくりと呼吸を整えてゆく。目を開けると、住宅街を隔てて川の半分が顔を出し、橙色に染まった光をきらきらと反射しているのが見えた。私は窓から顔を出してしばらくそれを眺めていたが、やがて今から自分がどこに行くべきかを確信した。

床に転がる眼玉をいまだ震える手で拾い集め、すべて箱の中にしまい込み、しっかりと蓋をする。これはここにあつてはいけないものだ。

私はその恐ろしい小さな箱をぎゅっと抱え込むと、侑の部屋を飛び出し、この息のつまる家を飛び出し、河川敷に向かって走り出した。

*

侑はいた。私は肩で息をしながら、川べりの青薄の茂みの中でうずくまっている少年を認めた。幼い侑と私が、いつも遊んでいた場所だ。私と侑がいなくなっても、薄はまったく変わらずにその青々とした細長い葉を揺らしている。間違いない、あれは侑だ。私は堤防の上から侑に声をかけようとした。「侑——」。

そのとき、突然茂みの中から異様なほど白く骨ばった手が伸びたかと思うと、その手に握られていたものがぎらりと不気味に光り、振り下ろされた。肉を突き刺すような鈍い音がした。間もなく「ゴウエツ」という、形容しがたい悲鳴のような、闇の奥底から絞り出したような醜い声の断片が響いた。

「まさか」

全身からさあつと血の気が引いていくような気がした。

「侑」

口からこぼれる言葉ははかなく震えて、声にならない。

やがてまた茂みから手が伸びる。振り下ろされる。私がただ見ている間に、何度もそれは繰り返される。鈍い不気味な音と、醜い死の断片が、誰もいない河川敷に反響していく。

「侑」

手を振り下ろす勢いはどんどん増してく。もはや短い悲鳴のようなものは聞こえなくなり、ただ耳を塞ぎたくなるような、肉を切り裂く低い音が幾度となく聞こえるだけだった。狂気――まさしくそれは狂気だった。

「侑！」

かすれた声で叫び、堤防を駆け下る。必死に青薄をかき分けると、そこには私の弟がしゃがんでいた。どす黒い色の血で染められた右手には小型のナイフを握りしめ、足元にはひくひくと手足を痙攣させたウシガエルがひっくり返っていた。侑はかつての水晶玉のような輝きの失せた、代わりに憂愁を抱えた瞳で、ただじっと私を見上げていた。そこにはどんな感情をも見て取れなかった。そしてまた侑は目を疑うほど白く、痩せこけていた。頬骨から指に至るまで、ありとあらゆる肉がそぎ落とされているかのようだった。同じ家に住んでいるのに、ほとんど顔を合わせる機会がなかったためにまったく気がつかなかったのだ。

「もうやめてよ」

私は涙を必死にこらえて、震える唇でようやくと言葉を紡いだ。

「なんでこんなことするの？」

侑はしばらくじっと私の瞳を覗き込んだまま黙っていた。蝉の鳴き声ときおり揺れる薄のざわめきが私と侑の間を通り抜けた。

「ああ、やっぱりだめだ。人の目を覗き込んでも、もう何もわからない。ただ不安と疑念が増すだけだ」

侑は氷のような不気味に透き通った声で唐突にそう言って立ち上がった。いつのまにか私より頭ひとつぶん高い背丈になっていた侑は、私を見下ろすような形になった。

「僕は色々考えた。特に父親が死んでから、四六時中考えていた。それは精神の苦闘のようなものだった」

侑は突然に私に近寄り、私が抱えていた小さな紙製の箱を血みどろの手でひったくった。私は思わず身を引いた。

侑は川べりにある無数の小石の上に座り込んだ。赤い夕日が侑を覆った。

「本当につらく、苦しいことだった。そして僕にはひとつのことがわかった。それは、僕は本来ならば克服すべき存在を、しないままにここまで来てしまったということだ」

侑はそこで言葉を切った。侑の口調は妙に淡々としていて、言葉を飲み込むのに時間がかかった。私は言葉を探した。「それは」

「これから克服できるものではないの？」

「それは無理だ」

侑は間を置かずに答えた。

「だって、もう死んでしまったんだから」

沈黙が降りた。侑は手に持った箱を開け、眼球を取り出すと、血で汚れた手でそのひとつを手にとって目の前にかざし、うっとりするようにそれを眺めた。

「僕の部屋に入ったの？」

しばらくして侑が言った。

「それをずっと部屋に置いていたら、うちはいつか地獄になってしまう」

侑はそれには答えなかった。

「人の目なんかよりも、ずっといい。人の目を見てみると、わけがわからなくなっただけで、自分の心の動きまで見失う。先月、たまたま河川敷を通りがかったらウシガエルが一匹見えたんだ。そしたら僕はもう衝動的に殺していた。死んだ目をみているときが唯一僕が落ち着くことのできる時間なんだ。もうどうしようもない。やめることはできない」

私はこの精神に蝕まれた哀れな弟に対してどうすることもできないように思えた。状況は私の想像をはるかに超えて悪いところまで来ていたのだ。弟には現実という色彩はもはや失われていた。

「何か嫌なことがあるなら、現実的な解決策を考えるべきだと思う。母さんに言えないことなら、私でも——」

「この家が歪んでいることに、気が付いていないの？」

侑は私の言葉を遮って言った。

「父が死ぬ前から、最初から歪んでいた。母との関係も、父との関係も。唯一正しい形で存在していたのは僕と姉さんとの関係だけだった。でもそれも次第に薄れ、やがて消えた。父の死によってその歪みは決定的なものになった。関係性の歪みが、僕と姉さんそのものを歪めていった。一度歪んだものはもうもとは戻らない」

侑は間を置かずに続けた。

「僕はこんなことになってしまったし——姉さんだって女の人が、毎朝一緒にいるあの人が好きじゃないか」

侑の言葉は私の心に冷たく突き刺さった。氷でできた鉛のようなものに思いきり横から殴られたような感覚があった。その衝撃と痛みはやがて全身に広がっていき、知らない種類の感情が私を襲った。頬が紅潮して、全身が熱かった。脈が速くなり、血が激しく波打つのがわかった。それでも私は何も言えなかった。否定の言葉を口にすることが、どうしてもできなかった。私はただその場に座り込み、こらえていた涙が堰が切れたように一気に溢れ出るのをそのままにしておくことしかできなかった。

どれくらい時間、そうしていたかわからない。私はひたすら涙を流し、侑は何も言わずただ川べりに座っていた。

まだ日は暮れていない。いかにも夏の夕べらしい、ありふれた暑さが漂っていた。真っ赤な空には白い半月がぼっかりと浮かび上がり、刷毛でさつと掃いたような薄い雲がところどころにさまよっていた。

私の心からは、熱量みたいなものが涙とともにそぎ落とされてしまった。どうすればいいのか、何もわからなかった。もう、侑を救い出すことなどどうでもいいことだった。帰ろう。何を言おうと、どれだけ歪んでいようと、帰る場所はひとつしかないのだ。

立ち上がろうとすると、スカートのポケットがさがさと腿に触れた。手を入れて中に入っていたものを取り出すと、四つ折りにされた、今朝侑の部屋から見つけ出した短冊であった。私は座っている侑のもとへ行き、何を言うでもなくそれを渡した。侑は血が固まってべとべとの手でそれを開いた。

『やさしいひとになりたいです』

幼き侑によってたったそれだけ書かれた短冊は、何かをしきりに訴えかけるように侑の手中で小刻みに震えていた。

侑はひとしきりそれを黙って見つめると、目の前を流れる川に放り込んだ。

短冊はしばらく水面をさまよっていたが、やがて浮き草に埋もれ、徐々に沈んでゆき、ついには燃えるような夕日に溶かされて静かに消えた。